星槎大学機関リポジトリ

論文種別	資料
タイトル	安心・安全な場で語り合い・聴き合うこと―第２回星槎ラウンドテーブルの報告―
Title	
著者	三輪 建二・川田 奈津子・小嶋 希・竹本美奈子・谷島 玲子・村田 直子・茂木正浩
Author(s)	MIWA Kenji, KAWADA Natsuko, KOJIMA Nozomi, TAKEMOTO Minako, TANISHIMA Reiko, MURATA Naoko, and MOGI Masahiro
誌名	星槎大学大学院紀要
Citation	*Seisa University Research Studies in Education*
巻	Vol. 3
号	No. 1
ページ	pp. 67-72
発行日	Oct.-28-2021
URL	http://id.nii.ac.jp/1486/00000244/

資料

安心・安全な場で語り合い・聴き合うこと
―第２回星槎ラウンドテーブルの報告－

三輪 建二[1,2,a]・川田 奈津子[1,b]・小嶋 希[1,b]・竹本美奈子[1,b]
谷島 玲子[2,c]・村田 直子[2,d]・茂木 正浩[2,d]
（[1]星槎大学大学院教育実践研究科・[2]星槎大学大学院教育学研究科）

1. はじめに：安心・安全な場をつくるために

第２回星槎ラウンドテーブルが、2021（令和３）年３月21日に開催された。第２回のラウンドテーブルを開催するにあたり、ワーキンググループ・メンバーが大切にしてきたものがある。それは「守秘義務による安心・安全」。「ここであなたが話された内容を一切外に漏らすことはありません」という約束である。「参加者の方々に、いかに安心して語っていただける場を提供できるか」を考えたとき、この約束は必須であり必要不可欠なものであったと、ラウンドテーブルが終わった今でも、私は強く思う。

あなたが誰かに話をする時、「この人には（あるいはこの場では）ここまで話そう」とか、「これは話さない方がいいな」と、語る内容を考えたり変更したり、時には話さないと決めたりした経験はないだろうか。もしかすると、「あのね…」と勇気を持って語ったのに、それが変な噂になったり、関係ない人から「聞いたよ」と言われたりして悲しい思いを経験した人も少なくないのではないかと思う。ラウンドテーブルは、そんな悲しい思いをする場所であってはならない。今まで話せなかったことを思い切って話せる場所、安心して心の内を語れる場所、そして新しい自分に向き合える場所であるために、ワーキンググループとしてできることは「安心・安全な場所の提供」に尽きると考えた。

では、そのために、ワーキンググループとして具体的にどうすればいいのか。どうすれば参加者の方々にわかっていただけるよう「守秘義務」をお伝えできるか。このことについて、私たちは話し合いを重ねてきた。その中で、開始前の説明で「守秘義務」の大切さを具体的な言葉でお伝えすることや、メンバーチェンジをして感想を語り合う場面で、「前のグループでこんな話が出た」と内容をシェアするのではなく、「私が語り合いの中で何を感じたか？」と、「私」を主語にして語ること等様々な具体案が出た。そしてそれらは、当日参加者の方々と確実に共有できたと思う。それは、決して独りよがりな思いで

[a] 星槎大学大学院教育実践研究科教授、教育学研究科博士後期課程教授
[b] 星槎大学大学院教育実践研究科専門職学位課程
[c] 星槎大学大学院客員研究員
[d] 星槎大学大学院教育学研究科修士課程

はなく、事後アンケートの結果からも読み取れるように思う（竹本 美奈子）。

2.準備段階

ワーキンググループの打ち合わせを表1にまとめた。

表1　ワーキンググループの打ち合わせ

回	実施期日	主な議題
第1回	2020年12月27日	WG新旧メンバーの顔合わせ、前回活動内容報告 ラウンドテーブルの目的・進行の確認、役割分担
第2回	2021年1月29日	ラウンドテーブルのテーマと内容の決定 参加者募集・名簿管理、当日進行の役割分担
第3回	2021年2月26日	ラウンドテーブル当日の詳細の検討 語りのメモ、当日進行のアナウンス、グーグルドライブ
第4回	2021年3月12日	参加人数、グループ分けの最終調整 ファシリテーター会議、語りのメモ(案)
第5回	2021年3月20日	ラウンドテーブル当日の最終確認

1）活動前：引き継がれる安心感

第2回ワーキンググループ・メンバーとして8名が新規で参加した。ラウンドテーブル未経験者が多い中で運営に参加できたのは、前回メンバーによる教育実践報告（三輪・三好・吉尾・杉本・石田　2021）、およびオブザーバーとしての参加があったためである。前回メンバーが、星槎ラウンドテーブルの目的や実践について見守りつつ、「自分たちのやりたいようにアレンジして良い」というスタンスでサポートしてくれたことが、新規メンバーの安心材料であった。

2）ワーキンググループ・チャンネル

ワーキンググループの活動はSlackを通して共有してきた。過去の検討内容も含めて、全員で共有することができた。また今後に向けて、次回のメンバーが安心して参加できるよう、ガントチャートや名簿、作成物などを整理した。

3）参加者募集

参加者募集は、1月末から実施した。前回参加者や、ワーキンググループ・メンバーからの声掛けが多かったが、大学院News Letterへの投稿を通じて、新たな参加表明もあった。教育学研究科（修士課程・博士後期課程）および教育実践研究科それぞれの学科生だけでなく、修了生や客員研究員、教員の参加もあり、学科や学年、学生と教員を超えたつながりが、共生をうたう星槎らしい。Slackの活用に不慣れな参加者もあったが、個別対応も行いつつ、全体への告知の場として有効であった。

4）語りのテーマ

ラウンドテーブルの語りのテーマは、「コロナ禍で、今何を考えていますか？－仕事の

こと、研究のこと、人とのつながりなどー」とした。（小嶋　希）

3. 当日の進行

当日の実施内容と進行を表２にまとめた。

表２　当日の進行表

時刻	内　容
8:30	Zoom へのアクセス開始
9:00	ラウンドテーブルの説明《WG リーダー》
9:05	ラウンドテーブル開始《異業種４名程度のグループ編成》 《１人 15 分間物語り、他のメンバーはじっくり聴く。 その後 15 分間共感と交流・対話タイム》
11:05	感想交流の説明《WG 司会》
11:00	感想交流《ランダムに８名程度のグループ編成》 《WG メンバー：ファシリテーター》
11:45	大野教授（教育実践研究科長）の感想と三輪からのコメント
11:50	WG 自己紹介
12:00	記念撮影・諸連絡《WG リーダー：アンケートについて》 終了

1）参加者とグループ分け

参加者は40名、内訳はワーキンググループ・メンバー12名、前回からの参加者13名、新規参加者15名である。所属の内訳は、教育実践研究科院生14名、教育学研究科修士課程院生13名、同博士後期課程院生２名、客員研究員・修了生９名、教員２名である。

今回は９時開始だった。9 時 5 分からグループセッション開始なので、5 分間でグループを設定した。Zoom に入室する時間差や当日キャンセルがあるので看護系、教員系、その他等を配慮したグループ設定に戸惑った。当初、予定していたグループから参加人数によって適宜、安心・安全に物語れるように 5 分間でグループ変更を行った。（茂木　正浩）

2）司会担当として

前日 22 日に宮城県沖の地震があり、自分の自宅がある神奈川まで揺れが届いていたので、規模が大きかったのだと思っていた。参加者の方々に被害を受けている方がいなくて安心した。当日の進行は予定通りにできた。今回は午前のみの日程だったので、全体での休憩の時間を設定しなかったが、途中退出される方もいなかったのでグループ内で調整されていたのだと思う。記念撮影での参加者の皆さんの笑顔が印象的であり、無事に終えることができて安心している。（川田　奈津子）

3）記録係・ファシリテーターとして

ラウンドテーブル打ち合わせに参加したときは、個人的なことが理由で気持ちが落ち込んでいたが、話ができたことで嬉しくなり、メンバーの一員として取り組んでみたいと思い記録係、三輪先生とのメンバー構成を担当した。

今回のキーワードは「守秘義務による安心・安全」になった。趣旨は賛成であったが、ファシリテーターの役割を担っていたこともあり、ワーキンググループ・メンバーが何を

語るのか、内容を理解できるだろうかと不安だった。実際はワーキンググループ・メンバーの「何とかなる！」の力強い合い言葉で乗り切ることができた。（谷島 玲子）

4. アンケート調査から

終了後のアンケートの回答をもとに、今回のラウンドテーブルを振り返ってみる。参加者40人中38名から回答があった。参加者の7割強が教育実践研究科か教育学研究科修士課程の所属で、研究員や教育研究科博士課程からの参加もあった。

参加の目的は、ラウンドテーブルへの興味、語りたい、自分自身を見つめ振り返り整理する、他者との交流やつながり等であった。コロナ禍の今、必要以上に人と会ったり話したりする機会が持てなくなり、仕事や生活が変化してしまった。星槎大学大学院教育学研究科は、もともと通信制であったことから、すべての講義がスムーズでのオンライン授業となったが、学生間の交流が少ない状況が続いている。

また、今回のラウンドテーブル参加者の多くが、教職あるいは看護職であり、COVID-19の影響をより強く感じて生活しているのではないかと思われた。

自由記載欄には、話ができた、聴いてもらえた、多様な参加者から意見が聞けた、研究科や実践の場の違いを超える良い機会になっていた、仲間ができた、ラウンドテーブルは卒業後も関わりを持てるという役割を担っている等があり、ラウンドテーブルに参加しなければ出会えなかった人々とのつながりを参加者は感じていたようであった。

コロナ禍で開催したラウンドテーブルは満足度が高く、次回の参加について、参加したい意思のある者が97%であった。参加者全員の協力により、語りたいことを語りつつ他者と交流し、参加者の目的を達成できる会にできたため、満足度も高くなったのではないかと推測している。（村田 直子）

5. 第２回星槎ラウンドテーブル振り返り：安心・安全な場をめぐって

最後に、第２回星槎ラウンドテーブルを終えた段階で、「安心・安全の場」をキーワードにした、ワーキンググループ・メンバーの振り返りの文章を掲載したい。

星槎ポーズと安心・安全な場：安心・安全な場で共に物語り、共感し合えた仲間との「星槎ポーズ(3本指)」で記念撮影。掛け声「せいさー」の、さーの時に３本指でポーズ。一体感が生まれた瞬間であった。（茂木 正浩）

参加者の皆様に支えられて行えた安心感：役割上、参加者の方々と交流する機会が多く、様々なお願いをすることが多かった。Slackへの案内やグーグルドライブの登録等、つたない説明でわかりにくいだろうなぁ、と自身が感じながらの対応であったが、参加される皆様はとても好意的な対応をしてくださっていた。参加する方が、それぞれの立場でラウンドテーブルという場の目的を理解しており、その場を良い場にしたいと願っているのだなと感じた。私自身、WGメンバーとして、他のWGメンバーや参加者の皆様に支えられて

いたのだなと実感した。（小嶋　希）

自分に問うという体験：ラウンドテーブルの参加者として、話題を準備しながら「自分に問う」自分がいることに気づく。そして、職種は違っていても相手の話の中に自分の答えがあるような気もしている。参加者の方々がそれぞれの立場で前向きに考えていこうとされている姿は私にエネルギーを与えてくれた。感想交流の中でも自身の立場に置き換えて話されている方も多くいたので、このラウンドテーブルが充実した時間になったことがわかりうれしかった。（川田　奈津子）

知らない者同士の語り合いと安心・安全：当日、緊張しながらもワーキンググループ・メンバーの方も自分の事を自由に語り、質問も興味を持てたことや、自分の考えや立場の違い等を重ねたりして、いつのまにか私も役割を気にすることがなくなっていた。楽しい時間を共有することができ、達成感を持つことができた。当たり前のことであるが、力を抜いて「聴き役に徹する」「仕切ろうとしない」ことが良かったと思った。

なぜ、安心・安全なのだろうか。語りのメモがテーマと項目のみ記載で後に残らない。メンバーはほぼ知らない人である。最終的には外に漏れない。これは互いの信頼関係が無ければ成り立たない。アンケート結果でも、守秘義務のキーワードは非常に良かったとの回答が多かった。私は大切な友人との別れがあったことを忘れないように語りのメモに書いて残した。決まりに囚われず、自由に話せることができ、理解してもらえる。ラウンドテーブルの守秘義務は他者を守るが、自分も守られる安心で安全な貴重な大人の学習の場であると思った。

参加者は看護師、教員が多かった。普段、対象の深い部分に関わる事が多い職種であるがゆえに、守秘義務は当然である。ラウンドテーブルの場は当人の抱えている苦悩、本音を正直に語っても、他に漏れることはない安心できる。その思いを話すことで他者が理解してくれ、共有された安心感をもたらしていると思う。知らない者同士が一期一会（知ってる人もいるかも）でも、話をすることで、心が解放され、新たな気持ちで次のステップへとチャレンジできる。（谷島　玲子）

アンケートに見る安心・安全の場：第2回のラウンドテーブルは、リーダーの発案で、守秘義務を大切にして完全なオンラインで開催された。それらのことにより、感染リスクのない安心・案全なつながりの場、自由に話し周りに受け入れてもらえる安心安全の場、話したことは外に漏れない安心安全の場という3つの安心安全が守られる会となったと思われた。（村田　直子）

何を言っても大丈夫な場所：忘れてはならないことが一つ。それは、参加者の方々に「安心・安全な場」をお届けできたのは、私たちワーキンググループが「安心・安全な場所」であったからだということである。ワーキンググループの話し合いの過程の中で、メンバーの中に「守秘義務」の大切さが確実に浸透していったからこそ、本物の「安心・安全な場」が提供できたのではないか。そして、そんな素晴らしいメンバーの一員でいさせてい

ただけたことに、改めて感謝の思いが湧く。

「何を言っても大丈夫な場所」というのは、実はそんなに多くない。職場や家庭は大切な場所だけれど、だからこそ、そこでは「話せない」ということもきっとある。そんな時に、「何を言っても大丈夫な場所」で語れたこと、聴いたこと、聴いてもらえたことが暖かな経験として参加者の方々の心に残っていれば嬉しいなと思う。そして、そんな場所としてラウンドテーブルがあるということを、これからも一人でも多くの人に伝えていきたいと思っている。（竹本 美奈子）

安心・安全の意味合い：第２回星槎ラウンドテーブルのキャッチフレーズは、竹本リーダーの提案で「守秘義務による安心・安全」となったが、安心・安全が意味するものも重層的になっていた。COVD-19に対する安心・安全への意識はあったかもしれないが、それだけではなさそうである。

コロナ禍の中だからこそ、院生には、仕事のやりくりや仕事と研究との両立をめぐる葛藤、授業以外の交流がほぼないままの学修への不安などがある。院生同士の交流が限定されている今だからこそ、オンラインでの交流は、物理的、時間的、心理的に安心・安全を保障するものになるはずである。ワーキンググループが提案した「コロナ禍で、今何を考えていますか？」は何を語っても良いという安心・安全な場を示していたのである。

第１回から変わらずに、「研究発表」でない点もポイントである。先行研究の整理から入る研究発表の場ではなく、悩みや不安を含めて率直に語り、聴く場になっている。発表ではなく「語る」、批判的なやりとりの代わりに共感をもって「聴く」営みがある。

ラウンドテーブル顧問として、終了時に次のようにコメントした。鷲田（2015）には、「哲学カフェ」が紹介されているが、このカフェの趣旨がほぼ、今回の星槎ラウンドテーブルにもつながると考えた。「ぐずぐず考える権利の保障」「問題の解決ではなく、問いの発見・更新を試みる」「悩みのモトになる判断や思考の枠組みを解きほぐす」「参加者が立てた問いを対話の中で書き換えていく」。

私たちはコロナ禍での不安を、あえて意識下に埋め込んでいたようである。ラウンドテーブルでの語り合いは、「悩みのモトになる判断や思考の枠組みを解きほぐす」営みであり、「参加者が立てた問いを対話の中で書き換えていく」営みであったと言えるだろう。発表会形式でなかったことが安心・安全な場だったことを示していた。（三輪 建二）

引用文献

三輪 建二・三好 加奈子・吉尾 美奈子・杉本 美恵・石田 智恵子（2021）．星槎ラウンドテーブルの企画・実施・振り返り　－対人関係専門職間での「物語る」「聴く」の心の対話をとおして－　星槎大学大学院紀要，2(2)，92-110.

鷲田 清一（2015）．哲学の使い方　岩波書店.